

Ⅰ「黄金為地」②

本願寺派布教使・行信教校校長 天岸淨圓先生

今日、正宣寺さんへ参ってくださって、お話しを聞いてくださっています。私がお話しをさせていただきます。みなさんがご法話をお聞き終わりになって、「あー、よかったな」と思われる人と「まあ長かったな」と思われる人と「もう二度と聞きたくないわ」って思われる人と、みなさん微妙に差があるわけですね。全員が「良いお説教やった」「ありがたいお説教やった」「ほんま結構やった」ってのは、これちょっと無理です。



例えば、紙に書いてもらった同じ原稿を10人のお坊さんが、その原稿通りにお話しするとします。でも聞いてくださった方は、「あの先生よりもこっちの先生が良いな」って必ずなるのです。同じお話をさせてもらっても、間の取り方とか、それから話しぶりとか、見た目とか、音の高さとか、スピードとかで、みんなそれぞれ好き嫌いがあるでしょう。ですから、「いやー、あの先生良いわ」って思われても、何がって言ったら、中身かどうか知らんやん。でも、そういうふうには必ずものを受け止める時には、同じものであっても、違いが生じるわけです。

これはもう仕方ないです。その人の好き嫌いですから。それぞれのみなさんの生活ぶりの積み重ねで出来てきたものですからね。同じようなものには絶対なりません。

そうしますと、ご法座っていかお寺が、こんなお説教のあるお寺は「良いお寺やな」って感じられます。それは、そのお説教された先生の話が良かったと受け止めた人です。同じお寺に同じ時に参っておられても、「あんな嫌やんか」っておっしゃっている方は、「あんなお寺」って感じられます。「良いお寺」と「あんなお寺」と2つ受け止められているわけですから、実はそういう受け止め方によって出来てゆく世界観、世界の受け止めってというのが、仏教でお話しをします、お浄土です。

正確に言いますと、「浄土」という言葉の反対は「穢土^{えいど}」と言います。浄土の「浄」は清らかな土、穢土の「穢」は穢れている土と読みます。でも、土はどちらもきれいも汚いもありません。土は土です。しかし、何がって言ったら、その土を、土って言ったらおかしいけれども、その人の心がどういうふうにしてその事柄を受け止めていくかによって、きれいも汚いも分けられるわけですね。ですから、私たちがいかにも別世界のようにしてお話しをしている、お浄土なのですけれども、実はお浄土ということ、今お話ししましたようなことを基礎にお聞きをいただきますと、いろんなことがわかってくるわけでありませぬ。

大切なことは、お浄土というのは、確かに私のいのちが終わった後、生まれさせていただくのだという面が強いのですけれども、それだけでなく、現在こうして生きている私たちにいろんな大切なことを気づかせてくださる大事な教えでもあるということなのです。

私ども、お勤めの時に、『^{ぶつせつあみだきょう} 仏説阿彌陀經』をよく読みます。その『阿彌陀經』には、阿彌陀さまという仏さまの心に受け止められた世界の有様というか、世界の有りようというものが説きあかされております。阿彌陀さまって言ったら、かえってわかりにくくなるかもしれませんので、仏さまとお呼びをします。その仏さまに成られた方の心に受け止められた世界の有りようというものが、『阿彌陀

経』に説かれております。これは、世界の有りようであるとともに、仏さまの心とはどういうものかということをお教えます。そして、その有りようを聞いていただくことによって、自分の見損ねている、もしくは受け止め損ねている状態っていうのに気づかされてくるっていうのが、お経が説かれていきます大事な意味やお話なのです。

私たちが、お仏壇、如来さまの前で『阿弥陀経』を読む時、はじめに「チーン、チーン」とおりんを打って、そして後をずっと読んでいって、途中でおりんをもういっぺん打ち直して、また後を読み続けます。この途中でおりんを打つ所ぐらいまでが、今申します阿弥陀さま、もしくは仏さまの心に受け止められている世界、逆に言ったら、仏さまの心とは、物事をこういうふうを受け止めていらっしゃるのですよっていうことなのです。もし興味っていうかお気持ちが起こらたら、一度『阿弥陀経』の初めの方いっぺんちょっと眺めてみてください。実際言いますと、『阿弥陀経』のあの部分に説いてあるのは、昔のインドのお寺の有様なのです。

“七重欄楯 七重羅網 七重行樹…”っていう言葉で始まりまして、これは実はお釈迦さまのおいでになられた頃のインドにあったお寺の原型みたいなものなのです。現在のお寺でいいましたら、「欄楯」っていうのは、お寺の境内を取り囲んでいる塀のことです。もっとわかりやすいのは、お宮さんの周囲に、石の玉垣って言って、石の垣根があると思います。あれのことです。それで、夏になったらお神輿が出ます。お神輿を見ていらっしゃったら、四角で、屋根が付いていて、4つの正面に鳥居が立っています。前後左右に鳥居があって、その鳥居にずっと垣根があると思います。あれが欄楯です。「羅網」っていうのは、直射日光を遮るテントとか簾です。日本と違って、向こうの方は日光が大きいですから、日本でしたら簾を掛けたら良いけれども、向こうはそうはいきませんから、本当はテントを張るのです。でもテントじゃちょっと格好悪いってことで、細工物になっています。欄楯と羅網っていうのは、お寺を飾って、お寺と一般の所とを結界していく垣根だったのです。その中にお堂があったり、ストウパーっていうお釈迦さまのお骨を祀った塔があったりします。お参りする時には、プールがあって、そこで体を清めて…。「行樹」っていうのは、ちょっとわかりませんが、並木です。木が植えてあるのですね。

全体を拾っていってみますと、要するにお寺という建物です。建物っていうかそういう…まあお寺でええやん。お寺ですから、当然地面の上に建っています。水もあります。木も生えています。鳥もいます。風も吹いています。木の葉も茂っています。中には人もいます。仏さまもおられます。何の事ない、いわゆる我々が日常生活をしている当たり前の世界ですね。どこひとつ変わった所はないはずですが、ただ、3000年昔と今とは、便利さがだいぶ違いますが、要するに一緒です。

ところが、その私たちが生きている世界を受け止める心が変わったら、これだけ変わるっていうのがお浄土です。受け止める心、もっと言ったら、そのものを見る心が変われば、世界はこれほど変わるというようなことです。

2020年7月1日「正宣寺真宗特別法座」より

YouTube「浄土真宗本願寺派 光寿山 正宣寺」チャンネルにて配信中